

秋の教養講座 2017「モリエールとその時代」 —フランス演劇の巨匠の生涯と作品を時代から読み解く—

恒例となりました秋の教養講座が、去る9月23日(土・祝)、放送大学奈良学習センターとの共催により、同センターZ308 講義室で開催されました。参加者は35名。講師は、奈良女子大学名誉教授で、当協会会員(創設メンバーの一人)でもある山本邦彦先生。内容は、フランス古典演劇の巨匠モリエールについて、時代と関連づけながら、生涯を追って個々の作品を紹介するという、短い時間にもかかわらず盛り沢山なものでした。プロジェクターで70以上の画像を使い、途中で『タルチュフ』第4幕第4場のコメディ・フランセーズでの名演の上映も交えながら、分かりやすくご説明いただきました。



強く印象に残ったのは、モリエールは彼の生きた時代によって作られた存在で、時代を抜きには語れないという点です。第一に、生まれたのが科学者が続出しデカルトが活躍した時代で、そのことが人間の自然な感情を大切にし、間違った迷信的な医術を批判したモリエールの考え方に大きな影響を与えたこと。第二に、時はルイ十四世の時代で、王と出会ったことで、王の劇団に指定され、劇場を与えられ、ヴェルサイユ宮のオープンイベントを任されるというチャンスを得たこと。王の矢継ぎ早の注文に翻弄されますが、しかし王がいなければ今日のモリエールはなかったと言えます。第三に、ちょうど宗教界が演劇を敵視するようになった頃で、

度重なる上演禁止の憂目にあったこと。1673年モリエールが亡くなった時も、教会司祭の許可が取れなくてまともに葬儀も行なわれなかったということです。ようやく1817年になってペール・ラシェーズ墓地に遺骨が移葬されたと言います。モリエールは、演劇とは人を喜ばせ楽しませるものだとの信念のもと、古典の素養を武器に、時代の風俗を描き、人間の典型的性格を造形して、新しい笑いの世界を編み出しました。それがスタンダールやバルザックなど後世の文学者にも大きな影響を与えることになったと結論づけられました。

講演終了後、会場を「菜宴」に移して、懇親会が行なわれました。今年の3月に「フランス・アラカルト」で講演されたジャンヌ・オーストリーさんを含め16名が参加。シャンパンで乾杯の後、お料理とワインを楽しみながら、一人ずつ質問や感想を述べて先生と交流。オーストリーさんが、フランスではモリエールの「Quelle galère !」というセリフが日常会話でも使われているという例を紹介したり、それを忘れないようにとメモを取る人もいたり、和気あいあいとした雰囲気となりました。(杉谷健治)



講演を終えて

山本 邦彦

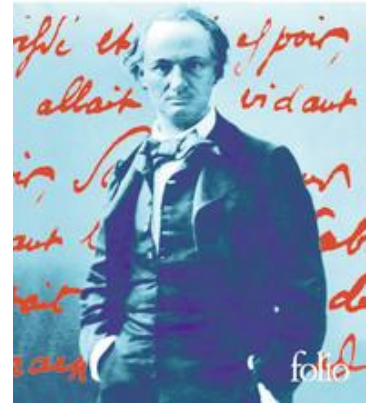
私はかつて大学の原書講読で学生さんたちとともに何篇ものモリエール作品を読みました。『才女気取り』『女房学校』『町人貴族』『スカバン』『気で病む男』などなど。しかし、モリエールの生涯をその時代背景のもとに通観する講義はいちども行いませんでした。今回、奈良日仏協会と放送大学奈良学習センターから依頼されたのを機に、果たせなかった講義を、無謀にも1時間半の持ち時間でやってみようと思い立ちました。言いたいことはいくらでもありました。映像資料もほとんど無限にありました。それを絞りに絞ってスライド75枚にまとめ、さらにそれに『タルチュフ』のさわり15分間の舞台録画を加えて、それで時間内に収まるかどうか？ その結果がああ詰りすぎの講演です。話がごちゃごちゃし過ぎてわかりづらかったかもしれません。その点はどうぞご容赦のほどを！

フランス文学の庭から <53> 名句の花束

三 野 博 司 (会長)

豪華、静けさ、逸楽
Luxe, calme et volupté
(ボードレール『悪の華』1861年)

Charles Baudelaire
Le Spleen de Paris



「旅への誘い」はボードレールの詩のなかでもとりわけ有名なものです。旅行企画会社のキャッチフレーズのようなこの表題を見ると、旅心が目覚め、そわそわして、目の前の仕事（たとえば「名句の花束」の原稿を書くとか）を放り出して、ふらっと出かけたくります。ただ、ボードレールの場合は一人旅ではありません。これは恋人を旅に誘う詩であり、詩人はマリー・ドブランとオランダに行くことを考えて、二人だけで暮らす夢を美しい詩に残したのです。

ボードレールの散文詩集『パリの憂鬱 Le Spleen de Paris』には、同じ「旅への誘い」と題した詩が収められており、その最初の数行では、恋人と一緒に訪れたいと願うこの国について、いっそう具体的に書かれています。

「類稀な国、黄金郷と人の呼ぶ国がある。私が古くからの女友達と訪れたいと夢見ている国だ。不思議な国、ヨーロッパの北方の霧に沈み、西洋における東洋と、ヨーロッパにおけるシナと、人は呼ぶことも出来るだろう。それほどに生彩ある、気紛れな幻想が^{ほしいまま}恣に成長し、巧緻微妙な植物を配置して、この国を丹念に、執拗に、飾り立てている」（福永武彦訳）

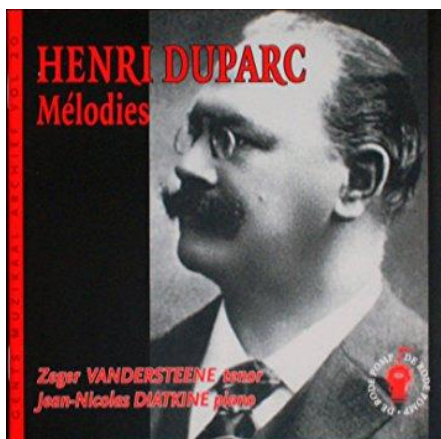
マチスが点描画法で描いたコート・ダジュールの風景とは、まさに対極ですね。ヨーロッパの北方の霧に包まれた理想郷、詩人が想像の中で実現した二人だけの国なのです。

『悪の華』に収められた韻文詩のほうの「旅への誘い」では、後にヴェルレーヌが多用することになる奇数脚のリズム、すなわち7音節と5音節を交互に繰り返しつつ、微妙な感情の揺れ動きを表現しています。それぞれ12行からなる3つの詩節では、5,5,7の音節が4度繰り返されて、流動的な印象を与え、2行のリフレインでは7,7と同じ音節数を並置して、逆に静的な印象を与えます。この対比、そして、3度繰り返されるリフレイン「Là, tout n'est qu'ordre et beauté, Luxe, calme et volupté.」が、音楽的リズムを生み出します。

この音楽性を完璧に表現したのが、アンリ・デュパルク（Henri Duparc, 1848-1933）です。若くしてピアノを修め、やがて作曲を始め、1870年、普法戦争の最中に「旅への誘い」を発表します。しかし、デュパルクは、38歳で病気のため作曲不能となり、その後自分の作品を焼却したので、わずか17の歌曲が残るだけです。なかでも「旅への誘い」は代表作であり、他の作曲家たちもこの詩に基づいて作曲を試みましたが、デュパルクほどの成功をおさめることはありませんでした。

デュパルクは第2節を省略して、第1節と第3節のみに作曲しました。全体にゆったりとしたテンポで、夢見

る国への憧れを歌い上げるという印象です。冒頭のピアノから漠とした気分をただよわせ、夢幻の理想郷が霧の中から浮かび上がってくるかのような響きです。それに誘われるように、声はほとんど即興演奏のように予期しない形で入ってきて、伸びやかな旋律に乗って歌われ、恋人に呼びかけます。最初のリフレインでは、ピアノはわずかに印象的な和音の響きだけとなり、ほとんどアカペラのように、詩人の夢見る理想が淡々と語るように歌われます。続いて、クレッシェンドしつつ、いっそう動きを高めたあと、音楽は自由さを増し、頂点を迎える展開となります。二つ目のリフレインでは、歌のパッセージがピアノで思い起こされ、歌が終わると、余韻を確かめるように、ピアノのアルペジオが次第に緩やかになり、夢幻の彼方へと消えてゆくのです。



Nos amis francophones à Nara (10) Nicholas Milette さん

En 2009, au tournant de mes 18 ans, je quitte le Québec pour aller vivre une immersion d'un an au Japon. J'y serai étudiant dans une école secondaire et je vivrai au sein d'une famille d'accueil. On choisit pour moi la ville de Sagamihara dans la préfecture de Kanagawa. Ne parlant aucun japonais au moment de mon départ et n'ayant jamais vécu à l'extérieur de ma province au Canada, c'était pour moi un grand saut. Cependant, huit ans plus tard, je peux affirmer que c'était une excellente décision et que celle-ci a orienté ma vie dans une direction que je n'aurais jamais pu prédire.

Ma venue à Nara en tant que Coordonnateur de Relations Internationales marque le début de ma troisième année au Japon. Même si on a choisi ce placement pour moi, je dois admettre qu'être placé à Nara fut une merveilleuse surprise! Même si j'y suis souvent venu lors de mes séjours précédents au Japon, je découvre à Nara un tout autre visage en y vivant. Par exemple, courir le soir dans le parc de Nara, après le départ des hordes de touristes qui l'occupent durant le jour, est quelque chose que je recommande à tous ceux qui vivent ici. Courir entre les temples ancestraux, dans un silence quasi-complet, sous le regard des cerfs qui somnolent, est réellement une expérience magique.



ニコラさんと奥様のマリルさん
興福寺五重塔にて

Ma vie à Nara ne fait que commencer, mais déjà je me sens chez moi dans cette ville chargée de nature, d'histoire et de culture.

2009 年、18 歳になったとき、カナダのケベック州から離れて、日本で丸 1 年間ホームステイをして高校へ通うことになりました。神奈川県相模原市というところでした。その時は片言の日本語も話せず、生まれ故郷から離れて暮らしたことがなかったので、私にとっては大変な冒険でした。でも、8 年経って、それはすばらしい決断だったし、そのおかげで思いもかけない人生が拓けたと言えます。今回奈良へ来たのは国際交流員としてで、日本に来て 3 年目になります。奈良に来ることが決まったときは本当にびっくりしました。それまでも何回か来ていましたが、住んでみると新しい発見ばかりでした。その一つは、昼間の大勢の観光客がいなくなった夜の奈良公園を走ることで、これは皆さんにもお勧めしたいことです。古びた寺院の間を、静寂のなか、まどろみつつある鹿に見守られて走るのは何とも不思議な体験です。奈良での生活は始まったばかりですが、自然、歴史、文化の豊かなこの町が我が家のように思えてきました。(ニコラ・ミレット)

フランス語で読む日本文学：谷崎潤一郎『吉野葛』より

今年もまもなく紅葉の季節を迎えます。フランス人に「紅葉」や「紅葉狩り」をフランス語で何と言えいいか尋ねると、「そんな文化はないからそれにぴったり相当する言葉はない」とのこと。谷崎潤一郎の小説『吉野葛』(昭和 6 年)には、わが奈良県の吉野の紅葉が描かれています。山あいには流れる吉野川、常緑樹の杉木立の峰の中で色とりどりに変化する木々、谷間に溢れる光、そして水の流れ。谷崎の文章に誘われて、桜のみならず紅葉の吉野にもぜひ訪れてみたくなりました。「上市から宮滝まで、道は相変らず吉野川の流れを右に取って進む。山が次第に深まるに連れて秋はいよいよ闊になる。(…)この辺、楓が割合に少なく、かつひと所にかたまっていないけれども、紅葉は今が真っ盛りで、蔦、樺、山漆などが、杉の木の多い峰のここかしこに点々として、最も濃い紅から最も薄い黄に至る色とりどりの葉を見せている。ひと口に紅葉と云うものの、こうして眺めると、黄の色も、褐の色も、紅の色も、その種類が実に複雑である。おなじ黄色い葉のうちにも、何十種と云うさまざまな違った黄色がある。(…)「繚乱」と云う言葉や、「千紫万紅」と云う言葉は、春の野の花を形容したものであろうが、ここのは秋のトーンであるところの「黄」を基調にした相違があるだけで、色彩の変化に富むことはおそらく春の野に劣るまい。そうしてその葉が、峰と峰との裂け目から溪合いへ溢れ込む光線の中を、ときどき金粉のようにきらめきつつ水に落ちる。」



秋の吉野山

De Kamiichi à Miyataki, le chemin continue en laissant toujours sur la droite le cours de la Yoshino. Au fur et à mesure que la montagne se fait plus profonde, l'automne éclate toujours davantage. (...) Dans ces parages, les érables sont relativement rares et ils croissent en ordre dispersé : mais, en cette période où les feuillages d'automne sont en leurs plein, les feuilles de lierre, de cirier, de sumac, punctuaient les sommets — où le cyprès domine — de taches de toutes couleurs allant du rouge le plus profond au jaune le plus clair. On parle tout uniment de « feuillages pourpres », mais ce qui s'offrait ainsi à nos yeux, c'était une variété vraiment indéfinissable de teintes jaunes, brun foncé, cramoisies. En même à s'en tenir aux feuilles de couleur jaune, on avait des dizaines de nuances de jaune ! (...) Des expressions comme « les diaprures » ou encore « mille sortes de violet, dix mille espèces de pourpre » sont en général utilisées pour décrire les landes au printemps, mais ici la diversité qu'affectait le jaune, couleur fondamentale de l'automne, ne le cédait sans doute pas aux landes printanières pour la variété des coloris. Et puis, on voyait parfois une feuille traverser le rayon lumineux qui, filtrant entre deux sommets, plongeait dans la vallée, pour aller, jetant des feux comme une paillette, retomber dans la rivière. (traduction par Jacqueline Pignot, Édition Gallimard, 1997)

2017 年度 ガイドクラブ勉強会 (9/16) 報告

フランス語圏の知人に名所の案内をしがてら、お互いのことをもっと知ろうと質問し合うことで、コミュニケーションが深まっていくのではないのでしょうか。今年度の勉強会では、そうした場面を想定して会話練習をしました。「あなたはどのようにフランス語（日本語）を習っているのですか？」等の例文を参加者同士で練習し、講師のビュール・レニエ先生が自分のことを答え、参加者にも質問しました。後半は、これまで Mon Nara に掲載してきた大神神社と酒造りについての記事を、先生が作成した語彙リストや例文で復習。以下に、参加者のみなさんとレニエ先生自身の作文の一部を紹介します。短くても素敵な個性が伝わってきます！（浅井直子）

Q. Quel est pour vous l'aspect de la langue française le plus difficile ? フランス語のむずかしいところは？

Quand je parle avec quelqu'un, j'ai de temps en temps de la difficulté à bien comprendre. Je dois faire des efforts pour suivre la conversation. Quand je lis des textes français, parfois, je ne saisis pas bien l'usage des noms. Il est fréquent que le même texte soit plus court en français qu'en japonais. Je trouve que c'est par la nominalisation du verbe qui est toujours pour moi un des problèmes les plus difficiles de la langue française. (Chikako)

会話では聞き取りが難しく話についていくのに集中しなくてはなりません。読むことでは名詞の用法が難しい。日本語に比べてフランス語は短く表現されていることが多い。動詞の名詞化によってそうなると思いますが、私にとってフランス語の最も難しい問題のひとつです。

Q. Qu'est-ce qui vous intéresse dans la culture française ? フランス文化のどんなところに興味がありますか？

Je m'intéresse aux coutumes françaises. Je ne sais pas si je peux les apprécier correctement ou non, mais, en France, les femmes sont indépendantes, notamment économiquement parce qu'elles travaillent. Mais, c'est aussi une des raisons pour lesquelles il y a beaucoup de divorces. Autrefois, au Japon, avant le mariage, on n'habitait pas ensemble parce que la virginité de la femme était très importante. En France, si la cohabitation échoue, une femme peut trouver facilement un autre copain. Pour cela, la France et le Japon sont très différents. Mais, maintenant, cela change aussi au Japon. (Junko)

フランスの習慣について興味があります。いいかどうかは別として、フランスの女性は働いているので経済的に独立しています。それが離婚の多い原因にもなっているのですが。日本ではかつて結婚前の女性の処女性が重要で、結婚前に一緒に住むということはありませんでした。フランスでは共同生活が失敗に終わっても、すぐに次の相手を見つけます。その点でフランスと日本は異なります。しかし日本でもこの慣習は消えつつあります。

Q. Y a-t-il un aspect de la culture française qui vous intéresse particulièrement ? フランス文化で特に興味深い点は？

J'aime bien les musiques françaises. Les musiques classiques de Couperin à Poulenc (une sorte de jeux de mot ?), ainsi que les chansons françaises. Je trouve qu'en comparaison des musiques d'autres pays, Allemagne, Italie et naturellement Japon, il y a une nette différence dans les sons. Je voudrais connaître le secret de sa particularité. La distinction, c'est par exemple les images qu'une musique entraîne pour nous : les musiques allemandes apportent certaines constructions mais les françaises font naître en nous leurs images pleines de couleurs et d'odeurs. Les chansons françaises, avec leurs mélodies et leurs paroles, captivent directement nos cœurs. Je crois que c'est parce que les chanteurs ou les chanteuses sont de véritables poètes. (Ryûichi)

フランス音楽が好きです。クーランからプーランク（言葉遊び?）、それにシャンソンも。ドイツやイタリア、もちろん日本の音楽と音自体が明らかに違います。その秘密は何なのか。違いというのは、たとえばドイツ音楽が何か構造物をイメージさせるとすれば、フランス音楽は豊かな色彩や香りまで含む映像を引き起こすことです。シャンソンがメロディーと詞で私たちの心を直接捉えるのは、歌い手が真の詩人だからだと思います。

Q. Qu'est-ce que vous aimez en France ? フランスで好きなものは？

Beaucoup de Japonais aiment la peinture impressionniste, et moi aussi. J'aime surtout Cézanne, Monet et Manet. J'adore particulièrement Cézanne, mais je ne peux pas bien expliquer pourquoi. Ses couleurs sont magnifiques, ses dessins aussi, et ses compositions sont extraordinaires ! Mais il me semble que ces mots n'expliquent pas bien les raisons pour lesquelles je l'adore. Les pommes dans ses natures mortes ne ressemblent pas à des pommes réelles. Pourtant, j'ai envie de voir ses pommes aussi longtemps que possible. Et je ne dirai jamais : « j'en ai assez de les voir ». (Yasuo)

私は印象派の絵画が好きです。画家ではセザンヌ、モネ、マネなど。特にセザンヌは、色も、デッサンも、構成も素晴らしいのですが、なぜ彼の絵にそれほど魅かれるのか、うまく説明することができません。彼の静物画のリンゴは本物ではありませんが、ただいつまでも見ていたいと思いますし、どれだけ見ても「もうこれで十分」と言うことはない気がするのです。

Q. Qu'est-ce que vous aimez au Japon ? 日本で好きなものは？

J'aime beaucoup les sakés « Kaze no mori » de Gosé à Nara. Ce sont des sakés pur riz très fruités et perlés. L'alcool est le meilleur des remèdes !... mais il ne faut pas en abuser, n'est-ce pas ?...

(Pierre)

僕は、奈良の御所市の「風の森」という日本酒が大好きです。微発泡でとてもフルーティな純米酒です。「酒は百薬の長！」...だけど、「お酒は程々に」ですね...！



フランス各地方の伝統菓子（４）アルザス♥お菓子の聖地-②

フランスでお菓子が生まれた背景にはもちろんその土地の豊富な農作物・乳製品が関わっているのですが、その他に修道院から生まれたお菓子、キリスト教の行事、また失敗やハプニングから生まれたもの等その背景はさまざまです。今回ご紹介するアルザスの『アニョー・パスカル』はキリスト教の行事、復活祭由来のもの。復活祭の時期になるとフランス全土で命の誕生や豊穡を表す「卵」や「ウサギ」の形のチョコレートが店頭に並びますが、アルザスでは赤いリボンを首に巻いたこのアニョー・パスカルもずらりと並び、季節感をかもし出します。陶器の生産地スフレンハイムで焼かれたアニョーパスカルのケーキ型に生地を流すと羊やウサギの形をしたケーキが焼けます。リキュールやフルーツなどは入らない、ふんわりとした生地でやさしい味がします。（柳谷安以子）



アニョーパスカルのケーキ型と焼きあがったケーキ

フランスの郷土料理（１）マルセイユのブイヤベース

フランス料理は、造形的で華やかで見た目にも楽しい料理ですが、古くよりフランス各地で愛されている郷土料理の土台のうえに、料理人たちの手による進化がかさねられつつ、築かれた現代フランス料理でもあるのです。

そんな郷土料理として、今回は私も大好きな料理「ブイヤベース」を紹介させていただきます。南仏マルセイユが本場のこの料理、元は漁師さんの料理で、漁から戻って市場で売り物にならない魚介類を大きな鍋で豪快に煮込んで作られていました。現在では材料や料理方法が細かく規定された 1980 年創設の憲章があります。材料として、カサゴなどの岩礁魚や蟹やエビ等の甲殻類はぶつ切りに。トマトやニンニクはギュッと潰して加え飲みかけの白ワイン等で煮込みます。香りづけに、サフラン、フェンネル、ドライオレンジの皮を使います。さらにルイユやクルトンを添えて供します。想像しただけで燦々と降り注ぐ太陽と地中海の青い海の景色、ブイヤベース美味しそうな香りが漂ってきませんか？ 辛口の白ワインやバンドールのような力強いロゼワインがよく合います。皆さまご家庭で我が家風のブイヤベースを作ってみて下さいね。それでは今宵も Bon appetit！（法人会員 北田浩久）



会員紹介

フランス歌曲の楽しみ

水谷 雅男（みづたに まさお）

この度、ご縁があって奈良日仏協会に入会させていただきました。43 年間勤めた母校大阪音楽大学を 1 年半前に退任し、現在は堺シティオペラ一般社団法人副理事長とフランス歌曲研究会（古澤淑子創立）の代表として、演奏と運営に携わっています。大阪音楽大学に関西歌劇団や関西二期会関係者が多く、早くからオペラに親しみました。大学院修了後は母校に勤務しながら、併行してオペラやオラトリオに出演しましたが、歌曲に於ける発声と外国語の必要性を感じ始めました。以来、イタリア歌曲（発声）、ドイツ歌曲、フランス歌曲、日本歌曲などを自分なりに取り組み、今もお歌っています。

オーケストラや吹奏楽を聴くことも楽しみのひとつで、ドレスデンに 1 年間滞在した時には、まずストラヴィンスキーの「春の祭典 (Le sacre du printemps)」に出かけました。舞台上ではなくオーケストラボックスから聴こえる管弦楽に合わせて舞う現代バレエは大迫力でした。シャンゼリゼ劇場での初演時の衝撃と喧騒を想像しながら、現代バレエとオーケストラとの協演を堪能し、至福の時間を過ごしました。

趣味としては鉄道が好きです。鉄道車両（含鋼索鉄道）のみならず、車掌さんの車内放送、保線の様子、そして駅（終着駅や途中駅）の情緒も好きです。幼少時から南海電車（狭軌）に慣れ親しんでいましたが、近鉄電車（ヨーロッパ標準軌）の重厚さは圧巻でした。宇治山田行の急行など、大きなパンタグラフを屋根に取り付けた、野趣あふれる深緑色の巨体勇姿は、南海にはない魅力でした。

最後にひとつお知らせです。11 月 23 日（木・祝）に「詩と音楽のマリアージュ」と題するコンサートにて、フランス歌曲を歌わせていただきます。三野会長のレクチャー、藤村理事のピアノで、お話と音楽が対等のパートナーとして作り上げる企画です。会場は 25 周年を迎えるホワイエヴェール（宇陀市榛原）です。ご来場を心よりお待ちしております。



自由投稿

モードが教えてくれたこと

伊藤 美知子 (いとう みちこ)

今年の2月に入会しました。きっかけは、シネクラブの例会で映画『とらんぷ譚』(1935)を鑑賞したことです。監督サッシャ・ギトリに魅了されたからでしょうか。私の記憶では、初めて見たフランス映画はジャン・コクトー監督の『美女と野獣』です。6歳の女の子には刺激が強すぎて怖かったことを覚えています。映画好きの母が超個性派の画家の友人と「フランスかぶれ」同士で仲良しだったこともあり、戦前・戦後のフランス映画によく私を連れて行ってくれました。子供心を虜にしたのが女優の美しくセットした髪、ウエストの細いスカート、ヒールのある靴、マニキュアの爪、大人の女の人。まさに最初に抱いたフランスの女性のイメージです。こうして私は個性の強い二人から「フランスかぶれ」を刷り込まれたのでした。

仕事としては、1965年以来アパレル産業や商社など、服飾業界で奮闘してまいりました。20代の新入社員の頃、フランスの『ELLE』誌の表紙を飾った、提携先のフランス最大のアパレルメーカーのキャシャレル社のクレープブラウスの実物が、デザイン室に展示してありました。難解な複数の色の組み合わせが調和して美しく、そのエレガントさには思わず脱帽でした。これはいったい何処から来るのか？ そのときに感じた大きな疑問は、今もすっきりとした答えが見つかっていません。歴史や風土を含め日本に伝統色があるように、フランスにも伝統色があるからでしょうか？ モードの世界には人生の喜びや悲しみ、それに疑問や不思議もいっぱいあり、私にとっては生涯楽しめるテーマです。「紅茶に浸したマドレーヌ」の味覚が忘れられていた過去を呼び起こしたように、モードもその形、色、質感などが想像力を誘います。今でも自分の衣服を処分する時、7センチ四方にカットした布をファイルしていますが、それを着ていた時代のさまざまな思い出、過去が蘇ります。

今年の7月、神戸ファッション美術館で開催された『収蔵品 実物を読み解くセミナー』に参加して、マリアノ・フォルチュニ (Mariano Fortuny, 1871-1949) の服8点を見ることができました。スペインで生まれ、後にヴェネチアに移り住んだ、絵画、写真、舞台装置などを幅広く手掛けた万能のデザイナーで、ブルーストの小説『失われた時を求めて』では、くりかえしフォルチュニの芸術性の高さが称賛されています。彼のドレスはパリの名門の貴婦人や社交界の女性に好まれました。そんな彼の作品をこの機会に長時間に渡って間近に観察したことで、時代背景も垣間見え、私の妄想癖はフル回転。ここでは、そのうちの2点を紹介します。

まず1点目は「デルフォス」ドレス。古代ギリシャ彫刻、デルフォスの馭者像にヒントを得て、絹サテン地に波打ちうねるプリーツが施されています。自然と身体に添い、動きによるプリーツの輝きが女性を魅力的に見せます。コルセットで身体をしめつけず身体を自然なままに包み込む、という点で革新的でした。裾や肩には140個のヴェネチアガラスのトンボ玉があしらわれていて、このうえなく贅沢で優雅な部屋着です。2点目は、古典的なモチーフのステンシル・プリントを施したフード付コートです。プリントの手法は日本の型染めの影響。フォルチュニはシルクスクリーンの発案者でもあります。オリエント、日本、中国、ビザンチン、イタリアルネサンス等の影響が感じられます。コートの素材は絹ベルベットに多色ステンシル、豪華で比類なき風格があります。

フォルチュニの業績は、クチュールの歴史においては黙殺されてきました。取り上げられるようになったのは1980年以降です。『失われた時を求めて』に登場するゲルマント公爵夫人の実在のモデルの一人であるグレフェール伯爵夫人は、1949年(フォルチュニ死去の年)、現在のガリエラ宮パリ市立モード美術館にフォルチュニ・コレクションを寄贈しています。いまだに彼のプリーツの再現は不可能です。フォルチュニは「ヴェネチアの魔術師」といってもいいでしょう。

「フランスかぶれ」からはじまって、モードの世界に魅了され続けた私の人生。とんでもないしくじりをやらかしたこともありますが、モードはいまなお、数えきれないほどの夢を見せて続けています。



右:「デルフォス」ドレス (1920年頃)

左:「ドミノ」ケープ (1930年代)

展覧会のお知らせ: パリ 16 区にある「ガリエラ宮パリ市立モード美術館」(Palais Galliera, Musée de la mode de la Ville de Paris) にて、10月4日から来年1月7日まで、「フォルチュニ、ヴェネチアのスペイン人」(Fortuny, un Espagnol à Venise) と題した、マリアノ・フォルチュニ回顧展が開催中です。

フランスの友人：不思議なご縁で始まった交流 大西 弘（おおにし ひろし）

フランス南西部の Aire Sur L'Adour という小さな町に住む友人夫妻との再会を果たす為、英国での会議を終えた後、8月29日にパリのシャルルドゴール空港からボルドーに向かった。友人の名前はジョジアンヌとアラン。ジョジアンヌは小原流の活け花の先生、アランは町医者であったが、今は現役を引退している。この夫婦とは2003年の秋、知人からの依頼で一日奈良公園と法隆寺を案内したのがきっかけで、以来14年間ずっと交流が続いている。ジョジアンヌは毎回活け花の生徒さんを連れて日本にやって来る。奈良には既に4回来ているが、そのうち一回は奈良日仏協会が2008年の秋に10名の受入れをした記録が残っている。我々夫婦も彼の地を訪れるのが今回で3回目である。さて、今回はジョ



ジアンヌの提案でいつもより少し長く4泊5日の滞在となった。今回は家内と共通の友人2名の合計4名で訪問した。

8月29日（火）：ジョジアンヌ夫妻と友人がにこやかにボルドーの空港で迎えてくれた。ボルドーは今や世界遺産の街として観光客も増え、活気に満ち溢れ、大変魅力ある街に変身していた。是非もう一度訪問したいと思う。夕方にボルドーを後にして、我々はジョジアンヌたちの住む Aire Sur L'Adour に向かった。ジョジアンヌの大きなお家に到着した時、一瞬ふと自分の家に戻ってきたような錯覚を覚えた。



将来の闘牛士と共に

8月30日（水）：早朝に Aire で一日が始まった。今回は普通誰にも見せない闘牛場の中を詳しく見せてもらってちょっと感動した。闘牛士がショーの始まる前に必ずお祈りをするという特別の場所があるのだが、必ず殺さなければならない牛の為に祈ると同時に命がけの戦いなるが故に自分の為にも祈るのである。何とも残酷なショーだと思うが、長い伝統は今も絶えることなく続いている。スペインや南フランスの人達の熱い血が騒ぐのだろうか。普段は極めて穏やかで優しい土地の人達からはちょっと想像し難い思いがした。その後、闘牛を飼育しているという牧場に案内してもらった。牧場の所有主は不在であったが、彼は過去5回も優勝している有名なマタドール（闘牛士の主役）なのである。10才前後の息子もまた父親同様マタドールになる事を夢見ているらしい。懸命に練習する姿がけなげにもちょっと痛々しく思えた。傍らではおばあちゃんが屈託のない孫をみながら、息子の事は誇らしく思うが、一日も早く闘牛士を辞めてほしいとふと本心を打ち明けたのが印象的であった。

この日の夜、ジョジアンヌの裏庭で25名の友人知人が集まってポットラックパーティーがあった。皆知っている人達ばかりで賑やかに楽しいひと時を過ごした。ほんのひと時とは言え、自分達の為にこうしていつも集まってくれる人達の優しさに涙が出るほど嬉しかった。

8月31日（木）：昼前にピレネー山脈の標高2000mにあるジョジアンヌ夫妻の山荘に向かった。山荘に来る途中で訪れた Saint-Bertrand という大きな教会で70歳前後と思われる日本人女性に案内してもらった。この地で生涯を終える覚悟のようであったが、滅多に日本人の訪れる事のないこの巡礼の地で偶然にも我々と出会い、日本への郷愁を抑え難く涙された姿が忘れられない。夕刻に山荘に到着。夕食は皆でラクレットを楽しんだ。



9月1日（金）：朝から周辺の散策を楽しみ、裏庭で昼食を取ってから、山荘を後にした。何とものんびりとした閑閑な風景に我々一行はどれほど癒された事か！！

9月2日（土）：翌朝ジョジアンヌとアランが我々のもう一人の友人が住む Pau の街まで送ってくれた。滅多に経験の出来ない素晴らしい思い出を沢山作ってくれたジョジアンヌとアラン夫妻に感謝の気持ちで一杯である。来年の日本での再会を楽しみにしている。

定年後、世界中の多くの友人達との出会いや別れを経験してきたが、偶然のきっかけで始まった極めて個人的な交流がこのように長く続くとは夢にも思っていなかった。人間の出会いとははかなくも美しいものであるとしみじみ感じている。



ピレネーの中腹にて

第 137 回 フランス・アラカルト「特別篇：ワインパーティ」

❖ 日時：2017 年 12 月 7 日（木）15:00～17:00（参加申込者は、当日 14:50 までに会場にお越しください）

❖ 会場：喫茶 Pal（生駒市北新町 11-8 tel. 0743-74-4255） ❖ 会費：会員 2500 円 一般 3500 円

❖ 定員：20 名（要予約） ❖ 問い合わせと申込先：tetsu11-kyo13@docomo.ne.jp tel. 090-1593-3738（高松）



❖ 早いもので、もう忘年会の案内が来るような時期になりました。というわけで、「フランス・アラカルト」年末バージョン特別篇、ワイン・パーティへのお誘いです。今回は、かた苦しい話は抜きにして、ワインの栓を抜き、ワインをテーマにして遊ぼうという趣向。全員参加で、ラベルを隠したワインを試飲してどんなワインか当てっこしたり、ワインに関するクイズ勝ち抜き戦、「思い出のワイン」にまつわる体験の告白などして、みんなで楽しいひとときを過ごしましょう。

第 45 回 奈良日仏協会シネクラブ例会

★10 月 22 日（日）13:30～17:00 ★奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室

★プログラム：ジョセフ・ロージー監督『パリの灯は遠く』（Monsieur Klein, 1976 年, 122 分）

★参加費：会員無料、一般 300 円 ★飲み会：例会終了後「味楽座」にて

★問合わせ：Nasai206@gmail.com（予約不要）

★今秋から来年にかけてアラン・ドロンの特集をお送りします。第一回目は『パリの灯は遠く』。

監督のジョセフ・ロージーはアメリカ生まれ、51 年イギリスに亡命し、57 年から本名で作品を発表。フランスのヌーヴェルヴァーグの映画作家たちの間で評価が高まり、フランスで撮った『エヴァの匂い』（62）や、イギリスで撮ったハロルド・ピンター脚本の『召使』（63）で彼の評価が確立。その後拠点をフランスに移し、スターを用いた大作を発表。アラン・ドロンの主演『暗殺者のメロディー』（72）がその第一作で、1940 年のトロツキー暗殺事件を描いている。『パリの灯は遠く』（76）はドロンのキャラクターの一面をよく捉えている。理由が分からずに逮捕される銀行支配人フランツ・K を描いたカフカの小説『審判』（1915）を思わせるものがあり、ロージー監督の特色である不条理と暴力そしてサスペンスに溢れた、反ファシズム映画の傑作であると思います。



《2017 年度第 4 回理事会報告》

…事務局

日時：2017 年 9 月 21 日（木）15:00～17:00

場所：放送大学奈良学習センター Z306 号室

出席者：三野、野島、浅井、井田、高松、杉谷、藤村、三木
議題 1. 2017 年度暫定会員 93 名。

議題 2. 前回理事会（7/20）後の活動：（7/23）第 44 回日仏シネクラブ例会サッシャ・ギトリ『夢を見ましょう』（9/16）ガイドクラブ勉強会。議題 3. 今後の行事：（9/23）秋の教養講座「モリエールとその時代」役割分担確認、（10/14）ガイドクラブ散策「大神神社と利き酒体験」、（10/22）第 44 回日仏シネクラブ例会アラン・ドロンの特集『パリの灯は遠く』（12/7）フランス・アラカルト特別篇「ワインパーティ」ワイン試飲、ワインクイズ他、（2/11）来年度総会・新年会：会場候補「菜宴」。

議題 4. Mon Nara：来年の発行、年 4 回発行と編集体制変更を検討。議題 5. その他：協会公式 FB 試運転中、協会主催講座の充実、その他講座運営の活動の充実を検討。

次回理事会：11 月 16 日（木）15:00～17:00 放送大学奈良学習センター Z308 号室にて。

会員通信

★11 月 23 日（木・祝）13:00～「詩と音楽のマリアージュ：フランス歌曲の午後」宇陀市 Foyer Vert にて、連絡先 090-8751-6408（藤村）

★12 月 3 日（日）大阪京橋 StudioJ クリスマスコンサート
連絡先 tel/fax 06-6922-6502（中辻）

★12 月 10 日（日）14:00～南城守美術講演会、演題「新写真実憶」奈良県立美術館、12:30 開場、80 名先着順、
連絡先 swkb92350@gaia.eonet.ne.jp（南城）



編集後記

★オリーブの木 (olivier) の枝がたわわに実る秋となりました。★オリーブ栽培は 5500～5000 年前イスラエルからレバノンの地中海沿岸、死海北部のヨルダン川渓谷で開始されたと言われます。★オリーブの実からとれるオリーブ油は、料理だけでなく、ランプの油・薬・化粧品としても利用され、オリーブの栽培は古代ギリシア文明の繁栄に欠かせないものだったようです。★旧約聖書ノアの方舟の物語では、ノアが放したハトがオリーブの枝をくわえて戻ったことが地上から水が引いた知らせとなり、「平和」の象徴となりました。★ギリシア神話では、オリーブの木をもたらした女神アテナにちなんで町はアテナイと名づけられ、オリーブは聖なる木とされました。★数年前、南仏カーニュ・シュル・メールにある画家ルノワールのアトリエを訪れ、樹齢百年もありそうなオリーブの古木が立ち並んでいるのを目にした時には、木々の存在感に圧倒されるばかりでした。★息子ジャン・ルノワールの映画『草上の昼食』に、その庭で撮影された場面が出てくると、カーニュの庭での感動が蘇ります。そして、父子の芸術の底流にフランスの豊かな自然と家族の愛情があることも。（N. Asai）

◆当協会では会員を募集しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。

◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は 11 月 30 日が原稿締切日です。

Mon Nara

Sept-Oct 2017 9-10 月合併号 numéro283

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司